
狐の嫁入り

卯月智文

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狐の嫁入り

【Nコード】

N0493Z

【作者名】

卯月智文

【あらすじ】

これは、ある男の話。

何もすることなく、ただ歩いていた、その時であった。

ある晴れた晩秋の昼。男は手ぶらで、河川敷を散歩していた。

整備された堤防をおりた先、雑草が踝から脛の高さ程度に生い茂った、適度に整備された広場に、男はいた。

男は何も持っていない訳でなく、ジーンズの後ろポケットに携帯、前右ポケットにハンカチ、左に財布が入っていた。

吹き抜ける冷たい北風と共に、男は軽く、ため息をついた。

（晴れか・・・）

男は自身の頭上を見上げながら、そう思った。そこには、ちぎれた綿のような雲が漂っていた。

苛立ちや一種の嫌悪にも似るその感情の原因は、男が雨が好きだったことに関係ないこともないが、それよりもっと直接的に感じる原因が他にあった。

数日前のこと。

男は成人を前にして、別離を体験した。

それは永遠の別れというわけではなく、対象が今までの人生を常に共にしてきた最重要人物というわけではない。

ただ数ヶ月一緒にいた女性と離れたに過ぎなかった。

しかし男の感覚は、（それは肉体的か精神的か分からないが）どこか持つてかれたような虚脱感に襲われていた。それが直線的な原因が分からないが、住処にいても何もすることもなく、今は何も考えることなく、男はただ広場を歩いていた。

ふと、男は北の空を見た。

そこは男の真上に広がっている青空とは対照的に、濃い灰色の雲に覆われていた。

男の頬に大粒の滴が当たった。刹那、大粒の雨が降ってきた。

男は駆け足で、橋の下へ避難した。そこは冷たい風が防がれ、橋の外よりもかなり暖かった。頭上は非常に数多くの車が行き交っているのだろうが、それを感じさせない程に、そこは静かであった。

すると、男が走ってきた方向とは逆のベクトルから、男と同年代らしき、眼鏡を掛けた女性が駆けて来た。

髪は黒く長く、洒落た洋服を着た、どこにでもいそうな彼女であったが、男は何ゆえか、惹かれるものを感じていた。果たしてそれが容姿なのか別の何かなのか。男には全く見当がつかなかった。

女性は眼鏡を外し、水滴で覆われたそのレンズを見つめていた。髪も洋服も雨によって濡れてはいたが、それを気にするそぶりもなく、ただ持っている赤ぶち眼鏡のこのみだけを気にかけていた。

「使います?」

考えるより先に、男は女に、右ポケットに入れていたハンカチを差し出していた。直後、我に返った男は、自分の顔がみるみる暑くなっていくのを感じた。

一方、女は笑顔で、

「あっありがとうございます!」

と答え、その青色のハンカチを受け取り、眼鏡のレンズを拭いた。「び、びっくりしますよね。こんな晴れてるのにいきなり雨なんて」男は思いきつて女に話しかけた。

「そうですね。ねえ知ってます? こういう天気のことを、『狐』っていう言葉を使ってなんて言うか?」

女は男の始めた会話に躊躇いなく参加する。

「わからないです」

「『狐の嫁入り』っていうんですよ。こうやって晴れてるときに雨を降らして、人間の気をそらして、その間に狐達は結婚するんですって」

「へえ。博識なんですね」

「いえいえ。ただ恥ずかしがりやな狐って面白いですよ」

女は男にハンカチを返し、

「ありがとうございます」

と満面の笑顔でもってお礼をした。

男は照れながら、それを隠しながら、軽く会釈して、ハンカチをポケットに戻す。

すると、雨が徐々に止んできた。

「もう止んじやいますね」

眼鏡をかけ直した女は言った。

「・・・ですね」

男は短く答えた。

その答えは男の心中を表すかのように、曖昧なものであった。

雨が完全に止み、女は男に別れを告げた。

それは永遠の別れというわけではなく、対象が今までの人生を常に共にしてきた最重要人物というわけではない。

当然、数ヶ月間一緒にいた女性と離れたという訳でもない。

だが、男を襲っていた虚脱感、いつの間にか自然と消失し、それどころか高揚感に満たされていた。

ただ残っていたのは、「狐の嫁入り」というワードと、
(晴れも悪くない)

女にまた会えるかもという、確証のない確信のみであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0493z/>

狐の嫁入り

2011年12月1日22時52分発行